

共に目を覚まして

祈りの礼拝

2008/3/16 棕櫚の主日

ゲツセマネの祈り

マタイによる福音書26章36～46節

それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという所に来て、「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」

それから、弟子たちのところへ戻って御覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われた。「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」

更に、二度目に向こうへ行行って祈られた。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。

そこで、彼らを離れ、また向こうへ行行って、三度目も同じ言葉で祈られた。それから、弟子たちのところに戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。時が近づいた。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

イエス様の苦しみ／その姿に

- 「悲しみもだえて始められた」
 - － イエス様の悲しみはその様子に表れていた
- 「わたしは死ぬばかりに悲しい」
- 「うつ伏せになり、祈って」
 - － 全身を地面に投げ出しておられた
- 「汗が血の滴るように地面に落ちた。」(ルカ)

イエス様の苦しみ／弟子たちに

- 弟子たちをそばに置かれ、「共に目を覚ましていなさい」と命じられた。
 - － 普段は一人で祈ることの多かったイエス様
 - － 頼りにならない弟子たちでも一緒にいて欲しかった
- 弟子たちの様子を3度見に行かれ、彼らを起こされ、しかられた
 - － 追い詰められたイエス様
 - － 眠っている弟子の姿に決意が揺らいだ？

イエス様の苦しみ／祈りに

- できればこの試練を受けたくない
 - －「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」
- 自分に言い聞かせるような祈り
- 同じ祈りを3度された
 - － なかなか覚悟が決まらなかった

イエス様の苦しみのわけ

- たった一人で立ち向かう試練
 - － 弟子たちの裏切りを知っておられた
- 私たちの罪を背負い、神の裁きを受ける
 - － 「これは、罪が赦されるように、多くの人のために流される私の血、契約の血です」(26:27)
- 親愛なる父に見捨てられる
 - － 「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(27:46)

ゲツセマネに学ぶ祈り

- 祈りの場所を定める
 - 「いつものようにオリーブ山に行かれると」(ルカ)
- 天の父に向かって祈る
 - 「(私の)父よ」(マタイ)「アッバ、父よ」(マルコ)
- 素直に、心を注ぎだして祈る
- 繰り返して祈っても良い
 - 「あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。」(マタイ6:7)

ゲツセマネに学ぶ祈り

- 「神の御心」を求めて祈る
 - － 自分の願いが叶うことではなく
 - － そのように思い切れることは簡単ではない！
- 祈りは具体的な努力である
 - － 「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」
- 共に目を覚まして祈ることの大切さ
 - － イエス様でさえ共に祈る者を求められた
 - － 目を覚まして祈るという愛